

7 象牙質異形成症の一症例

○溝部都孝、副島嘉男、一木数由、
久芳陽一、本川 渉、吉田 穰
福歯大・小児歯

象牙質異形成症は、象牙質形成異常を主徴とする、極めて稀な遺伝性疾患である。今回我々は、本学附属病院小児歯科外来を訪れた10才6ヶ月男児に於いて、本症例を経験したので報告する。

口腔内精査の結果、口腔粘膜等の異常所見は認められなかった。また、レントゲン診査により 3 | 4 の歯胚の欠除、及び全歯牙にわたる歯髓腔の形態異常・及び冠部歯髓腔に於ける不透過像を認めた。問診に依れば、患児及びその母親と、母方の次姉の第二子女児に於いて、乳歯列期に全乳歯の着色があり、また母方の長姉の第一子男児は、患児と同様の象牙質異形成症の所見があった。一方、父方には異常所見は見当たらなかった。患児の手根骨の化骨状態は、同性・同年令児に比べ劣っており、7～8才前後のものと同程度であった。患児は二人兄弟の長男で、その弟には異常所見は認められなかった。尚、患児の既往歴としては一才未満にて水痘・風疹に罹患しており、また母親は患児受胎中4ヶ月より5ヶ月の間に一時期、鉄分不足の為、治療を受けていた。

8 上顎牽引装置を用いて治療した乳歯列期反対咬合症例について

○広田和子、阿部和久、平野洋子、
尾田順民、緒方哲朗、山崎要一、
立川義博、野中和明、*村上照男、
中田 稔
*九大・歯・矯正
九大・歯・小児歯

我々は、第4回日本小児歯科学会九州地方会において、過去5年間の当教室における咬合に異常が見られた患者の実態調査を報告し、特に乳歯列期反対咬合の患者の治療に際して、どのような種類の装置を用いたかについて報告した。

今回は、上顎牽引装置を用いて被蓋改善を行った、上顎骨の劣成長に起因すると考えられる乳歯列期反対咬合患者10名（男児5名、女児5名）について、治療開始前と被蓋改善後を比較し、上顎牽引装置の効果について検討したので報告する。

上顎牽引装置には、村上の考案した装置を用いた。すなわち、口腔内装置として上顎乳犬歯の乳歯冠（あるいは帯環）と上顎第2乳臼歯の帯環を金属線で連結し、口蓋にはレジン床を付加した固定式床装置を使用し、口腔外装置はレジン製チンパッドとそれに連結したアクリル板を加熱しながら、顔面プロフィールに沿って屈曲した。口腔内装置の乳犬歯唇側につけたフックと、口腔外装置のフックとの間に輪ゴムをかけて前方牽引を行なった。上顎牽引開始年齢は4歳0カ月から6歳6カ月、Hellmanの歯牙年齢II Aで、被蓋改善に要した期間は2カ月から8カ月であった。上顎牽引装置の使用は、被蓋改善後1カ月から11カ月継続し、その後Chin capで保定を行なった。

治療開始前と被蓋改善後の比較は、模型計測および側貌頭部X線規格写真の角度と線計測を行い検討した。